

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成27年 9月 1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職名・学年 研究員

氏名 京 極 大 助

助成の種類	平成27年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	第15回ヨーロッパ進化生物学会大会 15th Congress of the European Society for Evolutionary Biology		
発表題目	Resistance to invasive congener's pollen in Japanese dandelion: Reproductive character displacement in response to biological invasion?		
開催場所	University of Lausanne, Lausanne city, Switzerland		
渡航期間	平成27年8月8日 ~ 平成27年8月16日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000 円	
	使用した助成金額	350,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	参加登録費	63,070 円
		バス賃	5,000 円
		宿泊料	79,089 円
		日当	36,000 円
	鉄道賃	2,946 円	
	航空賃の一部	163,895 円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 国際学会は多くの渡航費・参加費がかかりますが、今回助成を受けることで上記学会に参加する事ができました。このような貴重な機会を提供いただいたことに深く感謝します。国際学会への参加は研究発表の場としてだけでなく、世界の研究者と交流を深める場として重要であり、とりわけ若手研究者がキャリアの早い段階で国際学会に参加することには大きな意義があると思います。この点からも若手研究者を対象としたこのような助成金があることは非常に有益な事だと考えますので、ぜひ今後ともこの助成事業が継続されることを願います。		

平成 27 年度京都大学教育研究振興財団
国際研究集会発表助成報告書

京都大学大学院理学研究科
研究員 京極 大助

<参加学会の概要>

ヨーロッパ進化生物学会 (European Society for Evolutionary Biology) は進化生物学分野における世界最大規模の学会であり、2年に一度開かれる大会には、ヨーロッパを中心に世界中から多くの研究者が参加する。また本学会は進化生物学分野における重要な雑誌 *Journal of Evolutionary Biology* の出版母体でもある。今回参加した第 15 回大会はスイス・ローザンヌにあるローザンヌ大学 (University of Lausanne) で開催された。35 のセッションに分かれた 320 の口頭発表と 950 のポスター発表があり、参加者は約 1400 人であった。大会は 2015 年 8 月 9 日に reception party があり、翌日の 10 日から 14 日の 5 日間にわたり研究発表が行われた。大会最終日の夜には懇親会 (Congress diner) があり、また大会期間中は毎晩ローザンヌ市街において大会のバー (Congress bar) が開かれた。これらの催しも研究者間の交流を促進するのに大いに役立っていた。

<得られた成果>

私は Evolutionary analysis of ecological communities (生態群集の進化的解析) と題されたセッションにおいてポスター発表を行った。この発表では、在来種カンサイタンポポの個体数回復の背景に適応進化、特に侵略的外来種であるセイヨウタンポポへの対抗適応がある可能性を示唆するデータを発表した。ポスター会場ではタンポポの研究者を含む複数の研究者と議論を行うことができ、今後採るべきデータなどについて手がかりが得られた。発表内容については概ね好意的に受け止められたようであった。またセッションの時間外にポスターを見て、後日会場で話しかけてくれたタンポポ研究者の方もいた。私は博士課程在学中は昆虫を材料に研究を行っていたため、タンポポの研究は始めたばかりである。まだまだタンポポについては知識が不十分な点も多く、タンポポの研究者たちと議論を深められたことは非常に有意義であった。

また私は博士課程在学中に一週間ほどスウェーデンのウプサラ大学 (Uppsala University) に滞在した事があるが、本学会を通じてウプサラ大の知人を中心に旧交を温めることができた。ウプサラ大にはマメゾウムシ類を材料に性的対立の実証研究に取り組んでいる研究者が多くおり、彼らの研究は私が博士課程在学中から取り組んでいる研究と非常に関連が強い。私自身の現在進行中の実験の結果 (ポスター発表とは別) についてこれらの研究者と議論したり、彼らの実験手法を教えてもらったり、また彼らの発表を聞くことで当該グループの研究の進展状況を把握したりすることができた。これらの経験は今後実験を進めていく中で、また論文執筆を進める中で大いに役立つことと期待される。

また以前に学会等で会った事のある同世代の研究者何人かと再会できたことも個人的には刺激となった。お互い博士課程の学生だった頃に知り合った知人たちが、学位を取得した後に

どこの研究機関に移動し、どういった研究に今後取り組んでいくのかを聞く事ができた。このような話が聞けたことは、単に刺激となるだけではなく、海外、特にヨーロッパにおける学位取得後の若手研究者のキャリアの歩み方について理解を深める上で重要な事だと考える。私は将来海外でも研究活動を行いたいと考えているが、どういった選択肢があるのか、日本の研究者コミュニティにのみ所属していたのではなかなかこういった情報に触れる機会が少ない。

この他にも大会参加者の研究発表を聞く中で、まだ論文として出版されていない世界の最新の研究成果に多く触れられたことは大変良い刺激になった。例えば、性的対立の分野では表現型に関わるような遺伝分散に関連した研究が多い事が印象的であった（個々の研究は遺伝分散を記載する、遺伝分散を利用して実験進化を行う、など、必ずしも目的が共通なわけではなかった）。世界の研究者の立ち位置を確認できたことは、今後の私自身の研究の方向性を考える上でも役に立つと考えられる。また申請者自身の研究に直接関連しないようなテーマにおいても興味深い発表があり、刺激を受けた。

本大会は思った以上に参加者が多く、発表内容について後から質問しようにも発表者本人を見つけるのに苦労することがあったが（結局見つけることができず、帰国後にメールで問い合わせをすることになった人もいた）、全体としては他の参加者ともコミュニケーションを取りながら、有意義な学会参加ができた。特にヨーロッパ進化生物学会は今回が初めての参加であったが、大会の規模・発表の内容ともに素晴らしく、ぜひ今後とも定期的に参加したいと思えるものであった。

<謝辞>

最後に、今回の学会参加にあたり助成をいただいた京都大学教育研究振興財団にお礼申し上げます。